

(別紙様式2)

【特色あるフロンティアスクールの取り組み事例】

都道府県番号	44
都道府県名	大分県

学校名及び規模 ()

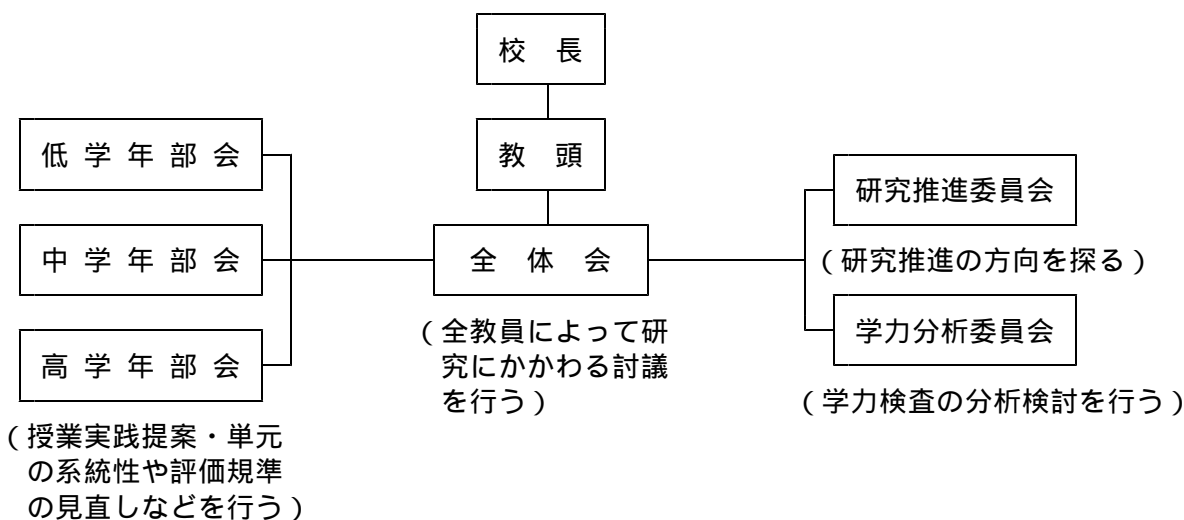
佐賀関町立佐賀関小学校										
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数	
学級数	1	1	1	1	2	2	0	8		
児童数	29	35	32	35	42	41	0	214	14	

実践研究の概要(主題及び設定の趣旨)

- ・主題(テーマ)
「主体的に問題意識をもち、興味関心を持って問題解決しようとする子どもの育成をめざして」
～算数科を中心として、基礎・基本を確かに身に付けさせる指導と評価の工夫～
- ・設定の趣旨
学習活動において、わかる・できる意識を子どもにもたせることによって自分から進んで学習対象に向かい、問題解決を行っていくようになるを考える。今年度は算数科を中心として、まず、子どもがわかる・できる意識を持つために必要となる基礎・基本を明らかにし、それらを確かに身に付けさせるための指導や評価について探っていくことをめざし、本主題を設定した。

実践研究の内容について

() 研究体制の工夫



() 実践研究の内容

ア. 指導体制の工夫

全学年、算数科において少人数学級編成を実施した。1～4学年では1学級を2学級に、5・6年では2学級を3学級に少人数編成(等質)し、学級担任に算数担当教諭を加える形で配置し、授業を行った。

イ．基礎・基本の明確化

「数と計算」「量と測定」「図形」「数量関係」の各領域において、わかる・できる意識をもつために必要となる基礎・基本の事項を明らかにし、さらに、単元の系統性をはっきりさせて、それぞれの単元の指導に活かしていった。

ウ．学習過程の明確化

算数科における学習過程を、「出会う 考える 出し合う(見直す) まとめる(広げる)」と設定し、子どもたちが学習活動の中で、わかる・できる意識をもつことができるように授業実践を進めていった。

エ．指導方法の工夫

授業実践を通して、各領域・単元・内容における具体的な指導の手だてや学習材の工夫・改善を行っていった。

(ア) 第3学年「表とグラフ」(数量関係)

資料を分類整理する活動において、学習材としておはじきゲームを活用し、ゲーム化することで興味関心の高まりや意欲の持続を図り、その得点や成績を表にまとめたりグラフに表したりする活動を考えていった。

(イ) 第6学年「分数のかけ算」(数と計算)

(分数)×(分数)の計算の仕方を考える活動において、個に応じて数直線・線分図・面積図を使って考えることができるように学習カードを準備し、操作活動や考える活動における抵抗や戸惑いを減らし、子どもたちの学習活動を進めていった。

(ウ) 第1学年「たしざん(繰り上がりのあるたし算)」(数と計算)

繰り上がりのある加法の計算の仕方を考える活動において、ボウリングゲームの得点を活用し、得点の合計を考えていく際にブロック操作で10のまとまりを意識させ、考える活動を進めていった。

オ．評価の工夫・改善

評価の視点や方法と具体的な手だて、評価規準と評価基準などについて、どのようにあるべきかを探っていった。また、評価規準については、単元に添った形で作成を試みる。

カ．研究にかかわる調査・分析・工夫・改善

(ア) 児童の学力の変容を調査・分析し、研究の方向や内容を見直していった。

(イ) 児童・教員・保護者の意識の変容を調査し、その結果をまとめ、分析し、研究に活かしていった。

() 成果と課題

少人数学級編成について

成果

- ・1学級20人～35人が、少人数での再編成で13人～18人となり、子どもたちの学習活動の様子がこれまで以上に見えるようになった。また、子どもたち1人ひとりにかかわる時間や回数も増え、個に応じての指導や支援が可能になった。
- ・今年度の少人数編成授業では、前半と後半・学期ごとにと担当の教師を変更したことによって、少人数編成という新しい試みに加えて教師の変更もあって、子どもたちや教師の意識に適度な緊張感をもって授業が進んでいった。
- ・子どもたちへの意識調査から、「少人数になってわかるようになりませんか」の問いに対して、学校全体で、54%(7月)・64%(1月)の子どもたちが「わかるようになった」の回答をしている。さらにその理由として、「手を挙げるとよくあたる」「人数が少なくて発表しやすい」「先生が自分のところに来ることが増えた」「今まで以上にゆっくり詳しく教えてもらえる」などを挙げている。
- ・個々の学習の様子が今まで以上に見えるようになったことによって、学級担任と算数担当教師が連絡を取り合い、新しく設置された算数教室で、課後に補充的な学習を行うことができた。

課題

- ・少人数での再編成ができ、個を大切にしながら授業をすることはできたものの、発展的な学習等より個に応じた指導が望まれる。そのために習熟度別の再編成やTT指導についても考えていくことが必要である。

学力について

《表1》 観点別の変化（1、2学期の比較）

	考え方	表現・処理	知識・理解
上がった	17%	12%	13%
変化なし(A A)	68%(54%)	82%(79%)	73%(67%)
下がった	15%	6%	14%

1・2学期の算数科の観点別到達度の評価基準をA(80～100点)・B(60～79点)・C(0～59点)と設定して個々の変化の割合。

《表2》 領域別到達度の状況

	数と計算		量と測定		図形		数量関係	
	1学期	2学期	1学期	2学期	1学期	2学期	1学期	2学期
1年	92	87				91		
2年	89	92	96		92	97		
3年	84	81	82	81		87	86	
4年	76	79			82	90		79
5年	85	86		81	87	81		
6年	85	85	83	80	73			79

領域別に1・2学期の該当単元の到達度(0～100点)を学年毎に表している。
(空欄は該当単元なし)

成果

- ・観点別到達度の変化を見ると、1学期から2学期への比較において、上がった(B A、C A、C B)と変わらない(A A)の割合が3つの観点で71～91%をしめており、ほぼ満足できる結果が得られていると考えられる。
- ・領域別の各学期・各学年における到達度を見ると、8割以上の項目で80点以上の到達度が達成できている。

課題

- ・観点別到達度の変化において下がった子について詳しく見ると、「考え方」では、「文章問題に抵抗がある、問題をよく読んでいなかった」、「表現・処理」では、「計算ミス、たしかめをきちんとやらなかった」、「知識・理解」では、「公式がきちんと身につけていなかった」などを理由として挙げていた。
- ・領域別到達度の項目において80点に満たない項目の単元を挙げてみると、4年「大きい数」「わり算」「およその数」「小数」「式と計算」「整理のしかた」、6年「直方体と立方体」「平均」である。学年の偏りはあるが、来年度以降も留意すべき単元としてとどめておかなければならない。
- ・個人のデータの蓄積はあるものの、さらに個に応じた指導を進めていくために、個人の学力や意識などを客観的に見ることができ、活用することができる個人カルテ的なものの整備をする必要がある。

指導や評価について

成果

- ・授業実践や学級担任と算数担当教師の打ち合わせなどによって、これまで以上に学習材や指導の手だて、子どものとらえ方や評価の仕方などについて意見交換や交流・還流ができ、子どもたちとともに教師の意識改革にもつながった。

課題

- ・領域や単元における指導方法の体系化や単元の系統表の整備、また、基礎・基本を再認識しながらの本校における評価基準の作成・整備が必要である。

() 成果の普及方策

- 8 / 16 学校間連携推進地域連絡会にて研究の方向発表
佐賀関町内におけるフロンティア指定校との研究交流
佐賀関町研究会の各種会議での交流と還流
- ・ 8 / 1 [研究主任・研究部長合同研修会]
テーマ 「研究内容の還流と各教科の基礎・基本のとらえ」
対象 各校研究主任・研究(教科)部会部長・佐賀関町教育研究会事務局員
- ・ 8 / 7 [校長・教頭合同研修会]
テーマ 「学力向上フロンティアスクールの指定を受けて」
対象 各校校長・教頭
- ・ 8 / 19 ~ 20 [地教委・校長合同研修会]
テーマ 「学力向上フロンティアスクールの指定を受けて、本校が目指している取組」
対象 町教育委員・各校校長

() その他

オープンスクールデーの実施(10月25日)
本年度、少人数学級編成での授業を初めて導入したこともあり、1~5校時のすべての時間を保護者や地域の方々へ開放し、参観をお願いした。参観後の意見に、「子どもたちの授業の様子がよく見えた」「少ない人数で楽しそうに授業を受けている子どもの顔が印象的だった」「同じ学年の別の学級の授業が気になった」などがあった。しっかりと受け止め、来年度の開催に向けて活かしていきたい。